

# 日蓮における『法華経』と『涅槃経』の位置づけ

— 智顛・吉蔵・源信との関連を通して —

関戸堯海

## 1. はじめに

日蓮（1222-82）が『法華経』を最高の経典として位置づけ、唱題成仏を主張したことは周知のことであるが、一方で「一切衆生悉有仏性」「仏性常住」を説く『涅槃経』を重視していたことも事実である。日蓮が天台大師智顛（538-597）の提唱した『法華経』注釈の成果を踏まえた上で、末法という宗教的な時代要請に基づいて、理論を中心とした天台教学を、より現実的な救済の法として昇華していったのが、日蓮の『法華経』信仰の世界といえるだろう。このため、『法華経』と『涅槃経』の位置づけにおいても、智顛の五時教判を下敷きとして、『涅槃経』を落ち穂拾いの経典とみて、『法華経』を補足する経典と位置づけている。

智顛は『法華玄義』において、中国南北朝時代（5-6世紀）の教相判釈を、南地三師と北地七師の南三北七に分類した上で、それを批判して五時八教の教判を立てている。また、智顛と同時代の三論の嘉祥大師吉蔵（549-623）は、三論のみならず『法華経』『華嚴経』などの諸大乘経典を講讀し注釈書を著しているが、教判論を否定する一方で仏性常住を説く『涅槃経』ではなく、『法華経』が最勝であることを指摘する記述もある。

さらに、平安時代の天台僧の慧心僧都源信（942-1017）は、『往生要集』を著して「厭離穢土 欣求浄土」の念仏最勝を説き、日本浄土教の基礎を築いたが、のちに『一乗要決』を著して、五性各別を説く法相教学を批判し、法華一乗の真实性を主張している。日蓮の伊豆流罪中の著作である『顕謗法鈔』には、『往生要集』の地獄の様相についての描写を再説しているともいえる記述があるが、同時に『一乗要決』に説かれる一闡提成仏思想に基づくと思われる『涅槃経』の引用が展開されている。

そこで、本稿では日蓮における『法華経』と『涅槃経』の位置づけについて、智顛の五時教判を中心としつつ、さらに吉蔵および源信の見解についても視野に入れて考察してみたい。

## 2. 智顛の五時教判と南三北七

智顛は『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』などの著作によって、『法華経』

を中心とする仏教思想を確立したが、『法華経』『涅槃経』の位置づけについては、主に光宅寺法雲（467-529）の所説を批判している。法雲は『法華経』の一乗思想については最大の評価を与えているが、久遠釈尊の「永遠性」についての説示が『涅槃経』ほど十分でないという見解を提示しているので、智顛や吉蔵から批判されることになっていく。

鳩摩羅什（344-413）以後の南北朝時代の中国で教判思想が発達しているが、その要因として『涅槃経』『華嚴経』『瓔珞経』『勝鬘経』などが次々と伝訳され、経論それぞれの異色燦爛とした法門に直面した仏教学者たちに沸き起こった、思想的要求の存在が指摘されている<sup>(1)</sup>。智顛の五時八教判は、南三北七と称される南北朝時代の江南の三師と江北の七師の教判を発展継承したものといえるが、智顛は『涅槃経』を『法華経』と同味の醍醐味に位置づけ、さらに追説追泯とみて『法華経』を補足する経典とみている。『涅槃経』が智顛の思想に重要な影響を及ぼしていることは否定できないが<sup>(2)</sup>、仏身常住を説く『涅槃経』を釈尊一代説法の最極と位置づける諸師の所論を批判し、法華最勝を主張するのである。

そこで、智顛の『法華玄義』第十により、南三北七の教判を示すと次のようになる<sup>(3)</sup>。

〔江南の三師〕

一 虎丘山の岌師 岌法師が誰を指すかは判然としないが、道生の四時教判説・四法輪説を知る名僧であったと思われる。頓・不定については他師と同様で、頓教に『華嚴経』、不定教に『勝鬘経』『金光明経』を位置づけ、漸教に三時教を立てる。

有相教(仏成道後の後十二年の間に三蔵見有得道を明すもの)

無相教(十二年の後、『法華経』に至るまで見空得道を明すもの)

常住教(悉有仏性闡提成仏を明す最後雙林の『涅槃経』)

二 宗愛法師 頓・不定は同じ。漸に四時教を立てる。三時教にさらに同帰教を加えて四時教とする。莊嚴寺の僧旻の用いるところ。宗師・愛師とみるならば、白馬寺曇愛と大昌寺僧宗が想定されるか。

有相教

無相教

同帰教(『法華経』会三帰一、万善悉く菩提に向うことを明す)

常住教

三 定林寺の僧柔・謝寺の慧次の二師および道場寺の慧観法師 頓・不定は同じ。

四時教にさらに褒貶抑揚教を加え、漸教に五時教を立てる。開善寺の智蔵・光宅寺の法雲の用いるところ。

有相教

無相教

褒貶抑揚教(『浄名経』『思益経』等の方等経)

同帰教

常住教

[河北の七師]

一 北地の師 五時教を立てる。人天教・無相教の他の三つは江南の教判と同じ。

人天教(提謂波利に対する説法)

有相教

無相教(『浄名経』『般若経』等をこの中に収める)

同帰教

常住教

二 菩提流支 二教を立てる。

半字教(仏成道の後十二年間の説法)

満字教(十二年の後の説法)

三 光統律師 四宗を立てる。

因縁宗(毘曇の六因四縁を指す)

假名宗(成実の三假を指す)

誑相宗(大品・三論を指す)

常宗(涅槃・華嚴等の常住仏性本有湛然を指す)

四 有師 四宗にさらに法界宗を加えて五宗教を立つ。護身寺の自軌の用いるところ。

因縁宗

假名宗

誑相宗

常宗(涅槃)

法界宗(華嚴)

五 有人 光統律師の四宗には収めていない部分があるとして、さらに真宗と円宗を加えて六宗を立てる耆闍寺の安凜の用いるところ。

因縁宗

假名宗

誑相宗

真宗(『法華經』の万善同歸諸仏法久後要當說真實を指す)

円宗(『大集經』の染淨俱融法界円普の説を指す)

常宗

六 北地の禪師 二種の大乗教を立てる。

有相大乘(華嚴・瓔珞・大品等に菩薩の十地の階級・功德・行相を説くもの)

無相大乘(楞伽・思益に真法には詮次なく、生死即涅槃であると説くもの)

七 北地禪師 一音教を立てる。諸仏は常に一乘を行じ一音を以て演説するが、衆生は機根の不同によって異解を生じるとして、四宗六宗二相半満等の教判を否定する。

また、智顛の〔五時教判・五味〕は次のようになる。

華嚴經……………乳味  
阿含經……………酪味  
方等經……………生酥味  
般若經……………熟酥味  
法華經・涅槃經(落ち穂拾い)……………醍醐味

そして、『法華玄義』第十をみると、次のように『法華經』と『涅槃經』を同じく醍醐味と位置づけている。

涅槃には稱して醍醐と爲し、此の經には大王の膳と名づく。故に知りぬ。二經は俱に是れ醍醐なり<sup>(4)</sup>。

さらに、『涅槃經』を追説追泯とみて『法華經』を補足する經典とすることについては、『涅槃經』みずからが摺捨教として位置づけているとして、如来性品の「法華(勸持品)の八千声聞の記別」を取り上げて、『法華文句』では次のように述べている。

然るに本門の得道は衆經に數倍せり。但だ數の多きのみならず。又、薰修して日久し。元本より迹を垂るる、処処に開引し中間に相ひ値て數數成熟し、今世には五味に節節に調伏し、収羅結撮して法華に歸會す。譬へば田家の春生じ夏長じ、耕種し耘治し、秋収め冬蔵て一時に穫刈するが如し。法華より已後、得道有るは、摺捨の如くならんのみ<sup>(5)</sup>。

日蓮は『報恩抄』に、この如来性品に言及して次のように述べており、『涅槃經』の位置づけについては、智顛の立場を継承した上で、南三北七の教判を批判

する点で同じ立場にある。

又法華經に対する時は、是の經の出世は乃至法華の中の八千の聲聞に記別を授くることを得て大菓実を成ずるが如く、秋収冬蔵して更に所作無きが如し等と云云。我れと涅槃經は法華經には劣るととける經文なり。かう經文は分明なれども、南北の大智の諸人の迷うて有りし經文なれば、末代の学者能く能く眼をとどむべし<sup>(6)</sup>。

このように、智顛の『法華經』解釈に大きな影響を受けている日蓮は一代五時の教判を尊重して、『法華經』が最もすぐれた經典であることの重要な論拠としていることが再確認できる。衆生の機根が熟し、いよいよ聞く側の準備が整ったところで、釈尊の円熟の境地である『法華經』が説かれたのであり、それでも理解することのできなかつた少数の者のために「落ち穂拾い」の『涅槃經』が説かれたと位置づけていることがわかる。

### 3. 吉蔵と日蓮

吉蔵は法雲の著作とされてきた『法華義記』を高く評価した上で、その研究業績を凌駕することを目標として『法華玄論』を著作したと考えられる。吉蔵によれば、法雲の『法華經』研究の最大の特色は、慧観等の南北朝時代の五時教判を抛りどころとして、『涅槃經』に「仏身の常住」と「仏性」を明かすのに対して、『法華經』にはそれらが十分に説かれていないので、『法華經』は『涅槃經』に価値的に劣ると結論した点にあった<sup>(7)</sup>。

これに対して吉蔵は、『法華經』にも「仏身の常住」と「仏性」が説かれていることを主張して法雲を批判し、法雲の所説を超克することを目指したのである。そのため、吉蔵は「諸大乘經顕道無異」を主張しながらも、『法華論疏』巻上には『法華經』神力品に言及するなどして、法華最勝について論じている。

神力品に云うが如し、如来の所有の一切の諸法と一切の自在の神力と一切の秘要の蔵と甚深の事は皆な此の經に於いて宣示し顕説すと。余經は但だ当教に義を明かして未だ諸仏の心を暢べず。是の故に此の經は最勝なり<sup>(8)</sup>。

吉蔵は教判仏教を否定して「諸大乘經顕道無異」を標榜しており、吉蔵以前の教判として紹介している『三論玄義』の記述を図示すると次のようになる<sup>(9)</sup>。

頓教……『華嚴經』

漸教……三乘別教『阿含經』

三乘通教『般若經』

抑揚教『維摩經』『思益梵天所問經』

同帰教『法華經』

常住教『涅槃經』

教判の創設者ともいえる慧観（生没年不詳）と『無量義經序』に五時七階の教判を示した劉虬（438-495）の教判思想が、南三北七の江南三師の思想的基盤となったという見解もあるが<sup>(10)</sup>、吉蔵の『三論玄義』における教判をみると、前掲の江南三師の教判の「三」に相当するものであり、法雲が用いるところであることは前述の通りである。

日蓮遺文ならびに『注法華經』には、多くはないが吉蔵の『法華經』関係の注釈書である『法華義疏』『法華玄論』『法華遊意』からの引用がみえる<sup>(11)</sup>。

『開目抄』をみると「妙法蓮華經」の経題の具足論を論証するための証文のひとつとして引用され、『法華義疏』に「沙とは具足と翻訳する」という意見があることが紹介されている。

吉蔵の疏に云く「沙とは翻じて具足となす」等云云<sup>(12)</sup>。

そして、『国清百録』<sup>(13)</sup>などには、吉蔵が智顛に書簡を送って『法華經』の講義を要請するなどの記述があつて、智顛と吉蔵に何らかの交渉があつたことが知られるが、智顛が開皇17年11月に世を去つたため実現しなかつた。また章安灌頂（561-632）の修治した『法華玄義』『法華文句』と、吉蔵の「法華經注釈書」には相互の影響がみられることが指摘されている。このため、日蓮遺文にも「吉蔵は中国第一の学匠で、三論宗の元祖。智顛と『法華經』の経文の解釈について論争したが論破されたので、自ら悔い改めて、高德の学者たちを勧誘して、智顛を招いて講義を拝聴し、高座へ登る時は自分の身を橋とした」と記すことが多い。

建治元年（1275）の『太田入道殿御返事』には、この点について次のように述べる。

嘉祥寺の吉蔵大師は、漢土第一の名匠、三論宗の元祖なり。呉会に独歩し、慢幢最も高し。天台大師に対して、已今当の文を諍い、立処に邪執を翻破し、謗人謗法の重罪を滅せんがために百余人の高徳を相語らい、智者大師を屈請して身を肉橋となし<sup>(14)</sup>

さらに、法雲に関する記述について日蓮遺文をみると、『法華經』よりも『涅槃經』がすぐれるとみる法雲の説を批判していることがわかる。

『報恩抄』には、法雲と南三北七について次のように述べる。

十流ありしかども、一流をもて最とせり。所謂南三の中の第三の光宅寺の法

雲法師これなり。此の人は一代の仏教を五にわかす。其の五の中に三経をえらびいだ（選出）す。所謂華嚴経・涅槃経・法華経なり。一切経の中には華嚴経第一、大王のごとし。涅槃経第二、摂政関白のごとし。第三法華経は公卿等のごとし<sup>(15)</sup>。

ここでは、南三北七の学派の中でも光宅寺の法雲の立義がもっとも秀でていたとして、法雲が一代仏教を五つに分類し、その中からもっとも勝れている三つの経を選び出して「一切経の中では『華嚴経』が第一で大王のようなもの、『涅槃経』が第二で摂政関白のようなもの、第三は『法華経』で公卿などのようなもの」と主張していることを取り上げ批判している。

このように、常住経と位置づけられる『涅槃経』が、久遠釈尊を明かすに不完全な『法華経』よりもすぐれるという法雲の所説を、日蓮は批判している。天台三大部の膨大な引用を通して、智顛の『法華経』解釈に影響を受けている日蓮であるが、『法華経』最勝を主張するという限定的な面において、吉蔵にも同様な立場がある点が見える。

#### 4. 源信の一闡提成仏説と『顕謗法鈔』

法雲や智顛以前の各師は「如来の常住」を説くことを『涅槃経』がすぐれる特徴とみている場合が多いが、日蓮遺文の『涅槃経』引用を鳥瞰してみると、「如来の常住」に関連する引用は多くないようであり、むしろ「一切衆生悉有仏性」「依法不依人」「仏法中の怨」などの、「如来の常住」以外の思想に関心が注がれているように感じられる。また、源信が『涅槃経』に基づいて提示する「一闡提の信による成仏」という見解に、日蓮が着目していたと推察される<sup>(16)</sup>。

日蓮が弘長二年（1262）の伊豆伊東配流中に著した『顕謗法鈔』（真蹟曾存）は、大きく四段に分かれるが、第一「八大地獄の因果を明す」における地獄の様相についての描写は、源信『往生要集』「大文第一 厭離穢土 一第一地獄の項一」を下敷きとしていると考えられる<sup>(17)</sup>。これは、一般的な地獄の知識を確認するための依用であるとも考えられるが、さらに『顕謗法鈔』では『涅槃経』の引用を通して「信心」と「成仏」について考える論調の根底に、源信『一乗要決』における一闡提成仏についての見解が存在しているのではないかと推察できる。

『顕謗法鈔』では、「信而不解」（信仰はあるが仏教教理についての理解が浅い）、「解而不信」（教理についての理解は深い信仰がない）などの「信仰」と「智

解」について四種の人が、謗法か否かについて論じている<sup>(18)</sup>。そして、『法華経』譬喩品・『涅槃経』如来性品を引用して、「信而不解」が謗法ではないことを論証し、また「解而不信」は一切衆生悉有仏性を知りながら一類の衆生には仏性がないと主張する者とみて、『涅槃経』の「恒河七種衆生」の第一「常没一闍提」とするのであって、この点で「如来性品に〈一闍提を除く〉とあるのは一闍提が信不具足だからである」という『一乗要決』との共通項を見出すことができる。

源信の仏性論については、本有無漏種子と真如種子との問題をもって骨格とし、五性の差別の本有か新薫の問題においても、有漏無漏の転不の問題においても、つねにこの種子観が背後にあるという評があるが、日蓮においては、そうした問題を理論的に論じるのではなくて、具体的な謗法の救済という面から、謗法・一闍提と不信の図式を導出したとみるのが妥当であろう<sup>(19)</sup>。

ひるがえって、鎌倉新仏教の祖師たちの『涅槃経』受容について考えてみると、道元・親鸞・日蓮がともに『涅槃経』の思想を重要視していることがわかる。道元の『正法眼蔵』仏性の巻のはじめには師子吼菩薩品の「一切衆生悉有仏性 如来常住無有変易」を引用して「悉有は仏性なり。悉有の一悉を衆生といふ」と読み、仏性論についての独創的なアプローチを示す<sup>(20)</sup>。親鸞は師子吼菩薩品の「仏性は大慈大悲・大信心である」を『教行信証』信巻・『浄土和讃』に引用するなど、「一切衆生悉有仏性」の理論を劣機の凡夫の救済へと現実化することを目指していると考えられ<sup>(21)</sup>、日蓮も唱題によって一切衆生が成仏できることの論拠としていることは周知のとおりである。

また、迦葉菩薩品の「善星比丘」について、『正法眼蔵』出家功德では、善星を悪知識に親しむ断善根とみて、それでも出家をゆるす釈尊の大慈大悲に着目し、仏法を学ぶためには善知識に親しむべきことを述べる。日蓮の『顕謗法鈔』でも、悪知識に親しむべきでないことを論じるために、阿闍世王や鶯堀摩羅とともに善星の名をあげる。『教行信証』真仏土巻では、悉有仏性に関連して、釈尊が断善根の善星をあえて出家させて善因を植えつけたことを引用する<sup>(22)</sup>。

この他にも、『正法眼蔵』『教行信証』と日蓮遺文には、共通する『涅槃経』引用がある場合や、道元・親鸞・日蓮それぞれ独自の『涅槃経』に関する見解が示されている場合もあるが、三者に共通していえることは、法雲が強調したような「如来の常住」の思想よりも、鎌倉新仏教の創世という時代要請を根底に持つ「凡夫の現実的な救済」を主眼として、『涅槃経』の思想に着目していると思われる点である。特に念仏や題目への「信心」によって、機根の劣った凡夫が往生・成仏

できることを論証する基盤として、『涅槃経』の一闡提成仏思想に着目するという、共通項を見出すことができるのではないかと考えられるのであり、ここに鎌倉新仏教における『涅槃経』受容の特色があると指摘できよう<sup>(23)</sup>。

## 5. おわりに

叙上の考察によって、日蓮が釈尊一代の説法のなかでも『法華経』を最高位に位置づける立場が、南三北七の教判を批判しつつ確立された智顛の五時教判に基づいていることが再確認できたと思われる。また、法雲を批判するという点においては、吉蔵の「法華経注釈書」の立場と同様な点もあることも理解できた。さらに、日蓮は機根の劣った凡夫の救済を考えるにあたって、信仰心と謗法の問題を関連づけて考えている部分も認められるが、その場面において源信の『一乗要決』の一闡提成仏思想に着目しているという推論も可能であろう。そして、鎌倉新仏教の祖師たちは、そろって『涅槃経』の思想的な重要性に着目していたようであるが、その観点は法雲の注目点である「如来の常住」ではなく、善星や一闡提などの往生・成仏が難しい者たちに対する『涅槃経』の態度であるように思える。

この点で、特に日蓮においては、『涅槃経』の「一切衆生悉有仏性」「如来の常住」はすでに『法華経』に説かれているところであり、『涅槃経』は『法華経』を補足する立場にある経典であるとする見解について確認できたと思われる。

## 註

- (1) 島地大等『天台教学史』（隆文館・1977年）239頁参照。
- (2) 藤井教公「天台智顛における涅槃經の位置づけ（一）（二）」（『大倉山論集』23・24号、1988年）。
- (3) 『大正新修大藏經』33卷801頁a（以下『正藏』と略称）。
- (4) 『正藏』33卷808頁a（原漢文・なお本稿での各引用文は以下、書き下し文にて記す）。
- (5) 『正藏』34卷137頁a。
- (6) 『昭和定本日蓮聖人遺文』1195頁・真蹟曾存・断簡現存（以下『定本』と略称）。
- (7) 吉蔵と『法華經』に関しては、丸山孝雄『法華教学研究序説－吉蔵における受容と展開－』（平楽寺書店、1978年）、菅野博史『中国法華思想の研究』（春秋社1994年）、松本史朗「法華經と日本文化に関する私見」（『駒沢大学仏教学部論集』第21号、1990年）、奥野光賢「吉蔵の法華經観」（『駒沢短期大学研究紀要』第33号、2005年）等を参照。
- (8) 『正藏』40卷787頁b。
- (9) 奥野光賢「吉蔵と『法華經』」（「第3回法華經思想懇話会研究発表」2006年）参照。
- (10) 島地大等『天台教学史』（隆文館・1977年）242頁参照。
- (11) 山中喜八『定本注法華經』「索引」（法蔵館、1980年）参照。『注法華經』をみると、『法華玄論』は〔二卷一二四〕（信解品・長者窮子喩、「五時」に関連か）、『法華義疏』は〔開經一三三〕（裏面）、『法華遊意』は〔一卷四〕（一卷見返し、「妙法蓮華經」の経題の具足論に関連か）の注記がみえる。
- (12) 『定本』569頁・真蹟曾存。『観心本尊抄』（『定遺』711頁・真蹟現存）にも同様な引用がある。
- (13) 『正藏』50卷584頁a。
- (14) 『定本』1117頁・真蹟断片現存。
- (15) 『定本』1200頁・真蹟曾存・断簡現存。
- (16) 拙著『日蓮聖人遺文涅槃經引用集』（山喜房仏書林、1990年）、『日蓮聖人教学の基礎的研究』（山喜房仏書林、1992年）を参照されたい。
- (17) 渡辺宝陽「謗法・墮獄覚え書き」（『日蓮教学研究所紀要』第4号、1977年）参照。
- (18) 『定本』272頁・真蹟曾存。なお、平川彰「大乘仏教における法華經の位置」（『平川彰著作集』第6巻、春秋社、1989年）には「法華經が有の立場に立つことは、法華經が信を重視することにも関係がある。信仰は実在を対象とするからである。法華經には随处に信について説かれているから、それらを検討することによって、法華經の信の性格を明らかにする必要がある」という『法華經』の「信」についての興味ある指摘がある。

- (19) 常盤大定『仏性の研究』(国書刊行会、1973年)432頁、および渡辺宝陽「日蓮聖人の  
仏性論の基盤」(『印度学仏教学研究』28巻2号、1980年)を参照。また『涅槃経』の  
仏性論・一闍提成仏思想については、横超慧日『涅槃経』(サーラ叢書26、平楽寺書店、  
1981年)、望月良晃『大乘涅槃経の研究』(春秋社、1988年)等を参照。
- (20) 『正蔵』12巻522頁c、『道元禅師全集』上巻14頁。鏡島元隆『道元禅師と引用経典・  
語録の研究』(木耳社、1965年)、酒井得元「正法眼蔵仏性の巻研究序説」(『日本名僧  
論集・道元』吉川弘文館、1983年)等を参照。
- (21) 山田龍城・福原亮巖「親鸞教学とその著作中の引用書」(『龍谷大学論集』365・366号、  
1960年)、土橋秀高「親鸞聖人と涅槃経」(同前)、騰 瑞夢「教行信証と涅槃経」(『宗  
学院論集』41号、1973年)、横超慧日「親鸞聖人と涅槃経」(『親鸞教学』8号、1966  
年)等を参照。
- (22) 『道元禅師全集』上巻615頁、『真宗聖教全書』2巻128頁、『定本』262頁・真蹟曾存。
- (23) 高木 豊『鎌倉仏教史研究』(岩波書店、1982年)、原 慎定「阿闍世物語の受容をめぐる  
問題 ―親鸞と日蓮の対比―」(『大崎学報』161号、2005年)、三輪是法「日蓮の法  
華経観 ―道元との比較―」(『印度学仏教学研究』43巻1号・44巻1号、1994・1995  
年)、拙稿「親鸞・道元と日蓮聖人の『涅槃経』受容」(『日蓮聖人教学の基礎的研究』  
91頁、山喜房仏書林、1992年)などを参照。